様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　21　年　6　月　18　日現在

研究種目：若手研究（B）
研究期間：2006～2008
課題番号：18720232
研究課題名（和文）　戦国期・織豊期城下町の空間構造に関する歴史地理学的研究

研究課題名（英文）　The Geographical Study on the Spatial Structure of the Japanese Castle Towns in the 16th century

研究代表者
山村　亜希　（YAMAMURA AKI）
愛知県立大学　文学部　准教授
研究者番号：50335212

研究成果の概要：
戦国期・織豊期城下町研究には、都市景観の構成要素、スケール、時期、景観描写の現実と認識との相違についての基準を明確化し、多面的かつ実証的な景観復原と空間分析を行う歴史地理学の方法・視点が必要であると考える。そして、このような視点・方法を導入し、全国の主要な戦国期・織豊期城下町を対象として空間構造の再検討を行った。その成果を総括した結果、ローカルな歴史的・地理的文脈に規定され、社会構造の変化とともに変遷を繰り返す、当該期城下町の動態的な空間構造が明らかとなった。ここから、地域の資史料分析とフィールドワークに立脚した空間構造の変遷プロセス研究の有効性を主張した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2006 年度	1,100,000	0	1,100,000
2007 年度	900,000	0	900,000
2008 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総　計	2,800,000	240,000	3,040,000

研究分野：中世都市の景観に関する歴史地理学研究
科研費の分科・細目：人文地理学・人文地理学
キーワード：戦国期城下町　織豊期城下町　空間構造　景観復原　景観変遷　自然地形　中世港町、中世都市

１．研究開始当初の背景

戦国期・織豊期城下町の空間構造は、中世都市研究で最も関心を集めてきたテーマである。1970～80年代前半にかけての歴史地理学における城下町の諸研究は、その後の研究に大きな影響を及ぼしたが、近年増大する発掘調査の成果を十分に説明することができなくなっている。近年まで通説の位置を占めてきたのは、1980年代後半以降の学際研究に支えられた小島道裕・前川要・千田嘉博の見解である（小島「戦国期城下町の構造」日本史研究257、1984、前川『都市考古学の研究』柏書房、1991、千田『織豊系城郭の形成』東京大学出版会、2000）。これは、戦国期城下町

を、戦国大名のイエ支配の貫徹する城館・武家地・直属商工業者居住地と、戦国大名のイエ支配から無縁の市町という二つの異質な空間が併存する、二元的な空間構造であったとみる見解である。この戦国期城下町の二元構造は、統一政権によって一元化され、求心的な空間構造の織豊期城下町が形成されるとする。

しかし、その後に各地で発掘調査が進展し、新たな成果が提示される中で、小島らの「二元から一元へ」という単線的な城下町の発展段階モデルに適合しない城下町が数多く見られるようになってきた。統一政権による織豊期城下町プランの受容の地域差も各地で指摘され、織豊期城下町も一元的で求心的なプランを貫徹できたとは限らないとされている。そして近年は、小島らの見解に代わる空間構造モデルの再構築が希求されている。しかし、最近の研究は、ここ二十年の間に急増した事例研究や発掘調査を十分に検討せぬまま、自らの議論に適合的な成果のみ恣意的に選択して、そこから空間構造を論じる危険性も生じている。このような状況をふまえると、今一度戦国期・織豊期城下町の空間構造を再検討する必要がある。

２．研究の目的

本研究の目的は、全国の戦国期・織豊期城下町の比較検討を通じて、新しい空間構造モデルを構築することである。この目的を達成するために、以下の三つの分析を行うことが有効であると考える。

（１）全国の戦国期・織豊期城下町の事例研究を収集し、それぞれの城下町における諸施設の分布、街路パターン、街区の形態、城郭・家臣屋敷地区・町場の形態に関して、先行研究を再検討し、それぞれの城下町の空間構造を明らかにする。

（２）戦国期・織豊期城下町における自然地形と空間構造との関連を分析する。

（３）（１）・（２）の分析をふまえて、それぞれの戦国期・織豊期城下町における空間構造、自然地形、領主権力の動向、地域の文脈（政治・社会・文化・宗教）、前身となる都市の空間構造といった点において、城下町の比較を行う。

３．研究の方法

以下のように段階的に研究を進める。

（１）全国の戦国期・織豊期城下町のうち主要なものを選定し、①先行研究の収集と再検討、②各城下町の立地した旧地形に関連する資料の収集と検討を行う。①に関しては、まず、各城下町の空間構造や景観を考察した論文・図書・市町村史・発掘調査報告書を網羅的に収集する。発掘調査が進行中の城下町においては、発掘調査報告書の刊行を待つと情報収集が数年遅れてしまうこともあるので、なるべく現地に出向き、遺跡を実見して、調査担当者から最新の成果の提供を受ける。次に、収集した先行研究において、景観構成要素の復原が実証的であるかどうかをチェックした上で、それぞれの城下町の空間構造を明らかにする。城下町の空間構造には、微地形やさらに規模の小さい微細微地形が影響を与えていたことが想定されるので、②の作業によって、各城下町における微地形・微細微地形レベルの地形を把握する。まず、各城下町の立地する地形を分析した論文・図書・市町村史・地形分類図・ハザードマップ等を収集する。また、明治期の地形図、戦後の米軍撮影の空中写真、高度成長期以前に作成された大縮尺の都市計画図を分析し、現地における地表面観察を行って、近代初期における微地形・微細微地形を検討する。さらに、発掘調査の行われている城下町においては、発掘調査の土層データやボーリング調査による地質

データを分析し、可能な限り戦国期・織豊期の旧地形を復原する。

（２）実証研究の不十分な城下町の空間構造の復原を行う。具体的には、各事例において、文献史料、考古資料、近世地誌・絵図、地籍図、地名、伝承といった景観復原データと、都市計画図、地形図、空中写真といった旧地形復原データを収集する。それらの資料をもとに、①微地形・微細微地形、② 諸施設の分布、街路パターン、街区の形態、城郭・家臣屋敷地区・町場の形態、③領主権力の動向、地域の文脈（政治・社会・文化・宗教）、前身となる都市の空間構造の分析を行って各城下町の空間構造を明らかにする。

（３）戦国期・織豊期城下町の空間構造について研究を総括する。

４．研究成果

戦国期～織豊期城下町の空間構造の特質として以下の6点を推定した。①都市形成期以前の諸施設の分布や自然地形といった先行する地理的文脈が、その後の戦国期城下町の空間構造を長期間にわたって強く規定した。②空間構造は不変のものではなく、戦国期を通じて絶えず変遷した。③空間構造は政治・社会・経済・宗教・文化・権力構造といった同時代の文脈と深く関連するが、両者の間にはタイムラグが存在する場合や空間構造が自律的に変遷する場合もあった。④戦国期においては、領主権力の空間認識やプランが完全に実現されたとは考えられず、都市空間に権力が及ぼす影響力には限界があった。⑤空間構造は①～④の状況を受けて、必然的に分散・複合的で可変的となり、時代によって程度の差はあれ、地域差も大きかった。⑥織豊期から近世初期における統一権力の出現によって、①～⑤の中世的な空間構造が大きく転換し、政治・経済・権力構造が空間構造にリアルタイムで投影され、領主権力の空間認識やプランが急速に実現されるようになった。このように、戦国期・織豊期における城下町の空間構造はきわめて動態的で、ローカルな歴史的・地理的文脈と関連しつつ絶えず変遷する点が、その後の近世城下町とは異なる特質であると言える。この点をふまえると、今後の城下町研究全体の方向も、静態的なモデルの構築を目標とするのではなく、地域の資史料分析とフィールドワークに立脚した空間構造の変遷プロセス研究へと転換を図る必要があると考える。

戦国期・織豊期城下町研究が学際的に推進されるようになった80年代以降、歴史地理学の景観復原と空間分析の視点・方法を適切に導入してその空間構造にアプローチする研究は少なかった。しかし、歴史地理学におけるこれらの視点と方法こそ、静態的な空間モデル適合研究を無条件に前提としてきたこれまでの研究に、動態的な空間構造のプロセス研究という突破口をもたらす有効な切り口であると考える。このように研究の新しい方向性を論理的かつ実証的に示した本研究は、発掘調査のデータは蓄積しつつも、それを活かす視点を見出せないでいる当該研究に一定のインパクトを与えるものであり、そこに本研究の独創性がある。

同時に本研究は、歴史地理学に対しても、自らの持つ視点と方法論の有効性と汎用性を主張し、歴史地理学の学際研究への貢献のあり方を提示した。同時に、都市を対象とする歴史地理学は、日本のみならず学界をリードする英語圏においても、景観から固定的なモデルや領主権力の意図、プランを読み解く思考を無意識に前提としているが、本研究はその思考では動態的な空間構造の実態を捉えられないことも主張した。このように本研究は、歴史地理学に自らの有効性と可能性を認識させると同時に、発想の転換・修正をも

迫るという点で独創的であり、国内外の当該分野の研究インパクトを与えるものである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）
①山村亜希，古図にみる守護所・戦国城下町，内堀信雄・鈴木正貴・仁木宏・三宅唯美編，『守護所と戦国城下町』，高志書院，東京，pp.447-470，6 月，2006 年，査読無
②山村亜希，史料分析による地域調査―過去の空間構造の復原のために―，梶田真ほか編『地域調査ことはじめ』，ナカニシヤ出版，京都，pp.137-150，3 月，2007 年，査読無
③山村亜希，回憶のなかの戦国城下町―吉田郡山古図の景観表現とその変化―，藤井譲治・杉山正明・金田章裕編，『大地の肖像』，京都大学出版会，京都，pp.224-246，3 月，2007 年，査読無
④山村亜希，戦国期山口の景観とその変化―街路・地割の形態分析を通じて―，愛知県立大学文学部論集（日本文化学科編），Vol.56，pp.55-85，3 月，2008 年，査読無
⑤山村亜希，中近世移行期における都市景観と地形―駿河国江尻・清水を事例として―，五味文彦・小野正敏編，『開発と災害』，新人物往来社，東京，pp.90-109，9 月，2008 年，査読無

〔学会発表〕（計３件）
①YAMAMURA AKI, The Landscape of Local political cities in Medieval Japan’ 第 14 回国際中世史学会（リーズ大学：イギリス・リーズ）2007 年 7 月 9 日
②山村亜希「中近世移行期における都市景観と自然地形」第 14 回中世都市研究会（於東京大学）2007 年 9 月 1 日
③山村亜希「日本中近世における地方城下町の景観」東アジア（韓国・日本）伝統都市景観　国際学術大会（於慶尚大学校：韓国・晋州）、2007 年 12 月 20 日

〔図書〕（計１件）
山村亜希，中世都市の空間構造，吉川弘文館，東京，322 頁，2009 年.

６．研究組織
(1)研究代表者
山村　亜希（YAMAMURA AKI）
愛知県立大学・文学部・准教授
研究者番号：50335212

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：